

---

## 慈照寺蔵 円山応挙筆「釈迦十六善神像」をめぐって

上嶋悟史(神戸大学)

---

円山応挙(1733-95)は、没後間もなく「写生画家」として位置づけられ、動植物をはじめとした対象物のスケッチ＝「写生」に基づく作画態度で知られるが「模写」に基づく絵画、とりわけ仏画制作も、画業を考える上で無視できない。

慈照寺蔵「釈迦十六善神像」はその箱書に「尊影者圓山主水應舉画之寄附」とあること、応挙の門人であった植松応令家にその粉本が伝来したことから、応挙筆と考えられてきた。本発表では、まずその制作経緯を明らかにする。

相国寺とその塔頭、末寺に関する記録は『相国寺史稿』に集成されている。これによると、慈照寺本が寄進された天明六年(1786)五月の前月まで、慈照寺が勧進を目的とする開帳を行っていたことが知られる。また住持であった新州周鼎は、その寿像を応挙に描かせたことが知られる。以上により応挙と周鼎の交友が、勧進に対応する応挙の寄進としての慈照寺本制作に結びついたり考えられる。

現在相国寺の大般若会では、応挙の門人とされる原在中(1750-1837)筆「釈迦十六善神像」が本尊として奉懸される。応挙没後の寛政十年(1798)九月十五日に寄進されたもので、『参暇寮日記』によれば絹は周鼎が用意し、表具は相国寺の他の什物に合わせて仕立てられた。この在中筆相国寺本は慈照寺本と酷似する。このほかにも京田辺市に位置する酬恩庵蔵在中筆「釈迦十六善神像」、大徳寺黄梅院蔵梅戸在親(在中息)筆「十六善神図」はいずれも慈照寺本と同一図様に基づく。

応令と同じく応挙の門人であった嶋田元直の家にも、慈照寺本の粉本が伝来した。この嶋田家粉本および植松家粉本にはともに「相国寺什物」との墨書をもつ。原派諸本および二粉本の存在により、慈照寺本がかつて相国寺に存在した鎌倉時代の制作と推定される原本の模写であること、その粉本が円山派内部で共有されていたことが推測される。

相国寺では、寛政元年(1789)二月の災死者追弔、五穀豊穰の祈祷において「長谷常春庵」から「古画之十六善神」を借用している。このような状況から発表者は、破損や紛失等の何らかの理由により相国寺原本が使用できず、その代替として慈照寺本および在中筆相国寺本が制作されたと考える。

さらに、ここに挙げた諸本において中尊釈迦が周囲の善神に囲繞されるように描かれるのに対して、慈照寺本では釈迦が最上部に位置する。ここには「郭子儀祝賀図」(三井記念美術館蔵)や「牡丹孔雀図」(相国寺蔵)などと通底する応挙独自の構成意識が働いている。以上のように応挙の仏画制作における古画受容の具体的なありようについて明らかにする。